

れは、地獄にたとえられよう。狭い船内で幾日もじっと我慢するしかない時の頭はモウロウとして思考力がにぶり（そうだからこそ何日も過せるはずであるが）、世の中の進歩から1人とり残されたような錯覚におちいる。

話しは大きくそれたが、3日目になってやっと久米島の真謝港へ避難することが決定された。上陸後の最大の目標は胃に清涼飲料水を満たし、スカットさわやかになることであった。しかしヒビ割れたように痛む喉、胃袋にとってはそれはただ味気のないものでしかなく、半分も飲めなかった。翌日再び漁場へ戻った。沖合はまだうねりがあったが、我慢できない程ではなく、気分的にも楽になっていたので仕事もこなせるようになった。

人間の体の機能というものは不思議なものでその頃になると遅くまで話しこんだり、夜食をとるまでになってくる。予定の仕事が終っても照らしばなしにしておいた集魚灯の下は明るく、いつのまにか魚やゴカイ類の子供が乱舞していてその様子を何気なく眺めていた。すると明るい水中の小魚めがけて突進するように来てたくみに捕えて暗やみに消えていく生物がいるのに気付いた。その行動を数回ながめているうちにある確信をもってタモ網ですくってみた。それは間違いなく3m台のトビイカの子供であった。というのもそれまでの調査でトビイカ雌の熟卵の保有状態が長期にわたっていたことから、その産卵時期は長く、沖縄近海においても産卵されている可能性も予想され、なによりも稚イカが沖縄近海で採捕されてもよいという考えに到達していたからである。こうしてトビイカの稚イカが始めて沖縄近海で採捕されたのである。それを1つ1つバケツに入れ、その飛び上り方、着地の仕方を船上で観察するのも楽しいものであった。

本種は莫大な潜在資源量が見積られているにもかかわらずその生態は不明な点が多い。ここで紹介したのはごくささやかな発見であるがこういう積み重ねも大事と思う。一つの偶然の発見が大きな成果を導き出した例は多いからである。

おわりに、船は周知のように水産研究を支える土台である。『くろしお』の沿岸漁業の発展に果たした役割は大きい。これまで不便をかこいながら協力をおしまなかった乗組員の方々を含めて本当にごくろうさまでしたといたい。

## 『くろしお』での試験研究の概況

当真嗣誠

『くろしお』は、昭和41年8月に糸満造船所で建造され、以来14年間、沖縄の沿岸海域の漁場調査や各種試験研究活動に就航してきた。14年と云う永い歲月の中

には乗組員でなければ味わえない様々な体験談が秘められていることは論ずるまでもない。私は、研究員の一人として調査業務の一端を述べて見たいと思います。くろしおは代船を迎える今日まで数々の役目を大過なく果たし、然も永年に亘り海上における海難事故等は一度も発生しなかった。このようなことは至極当然のことでありたいが過去を振り返って見ると今更ながら安全航海の尊さを改めて思い起すものであります。ではくろしおのあゆみとして、これまで実施して来た事業の概況を簡単にご紹介させていただきますと、まず昭和43年に深海ザメの調査が行われ水深250m～700mの深海域にアイザメ属の新漁場が発見され、種の同定を当時の東海区水産研究所の阿部宗明博士に依頼した処、新種であることが判明し、昭和48年にオキナワヤジリザメと命名し学会に発表された。このオキナワヤジリザメはサメ特有の臭みがなく肉質は白身で美味であり、刺身やフライ或はテンプラの芯等にも適しており加工面の研究は余り行われていないが食用としての価値は高く評価されて然るべきと思われる。このサメの肝臓重量は魚体総重量の20%～25%を占め肝臓油にはスクアレン（高度不飽和炭化水素）を多量に含有している（含有率69%～94%）。スクアレンは高級潤滑油や化粧品原料として利用され貴重な資源であるが現在のところ殆んど生産されてない状況であります。

本県における定置網漁業の発端となった改良ます網は、粕谷製網有限会社（長崎県諫早市）の試験網提供と技術協力で昭和46年11月に始めて導入適応化試験がくろしおによって実施されました。糸満、勝連、知念の各地先沿岸で試験操業が展開され、その成果は随所で確認されるようになり、爾後各業者の企業努力等によって発展を続け県内の普及と共に着業統数も増加しつつ、その一方知念漁協をはじめ他の地域でも本格的な定置網に変身して着実に漁獲生産を伸すようになりました。今後の課題として定置網業者が共存共栄を続けるには過当操業を避け適材適所の配置展開を充分考慮した操業形態を樹立すれば回遊性魚類資源の有効利用が図られ、消エネ型漁業として発展することが期待されよう。

200海里時代の到来に伴い、沿岸漁業の見直しが重要視されるようになった今日、人工魚礁の造成事業は我が沖縄県でも年々増大し、漁業権内の並型魚礁及び共同漁業権外の大型魚礁や人工礁魚礁が次々に設置されているが、国の沿岸漁場整備開発事業に基づいて本格的な人工魚礁造成が始まったのは昭和51年からである。因に昭和54年度までに県内に設置された大型魚礁は33ヶ所、人工礁魚礁（大型魚礁の10倍の規模）1ヶ所となっている。くろしおでは、これ等を設置するための適地の選定、設置場所一帯の海洋環境調査、設置後の魚礁の配置、構造、規模並びに魚礁の効果調査等が続けられ、タマンやミーバイ類を始め底着性魚類の人工魚礁への蛸集効果も確認されております。さらに魚礁沈設後の日時経過とともに蛸集魚類も増加の傾向を示し、漁場造成の果す役割は200海里時代に対処してゆくためにも重要な事業の一つであると思慮するものであります。

昭和47年の本土復帰とともに、本県も全国水産試験場の共通事業である漁況海況予報事業が国庫補助でスタートした。図南丸では沖合定線調査（東シナ海の黒潮横断観測）を実施し、くろしおでは金武湾、中城湾を含めた沖縄南部沿岸定線を設定して（18測定）年間11回の海洋観測が行われております。この観測データは迅速に処理して速報することも大切なことですが、資料の集積によって漁況、海況の季節変動が解明され予報事業の精度向上と情報の短期、長期予報を円滑に提供出来るような体制を整え漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営の安定に資すると云うもので地味な仕事ではあるが根気強く継続すれば縁の下の何とかになることでしょう。

トビイカ釣漁業の漁具漁法の改善を図るための一方策として自動イカ釣機を導入し、トビイカに対する漁獲性能試験を実施した結果は、漁獲効率についての知見は得られているが自動釣機自体の改良すべき幾つかの問題点を残しているものの将来に向けて実用化の可能性を有し、トビイカ用自動釣機の開発が実現するならば本県独特の漁業として飛躍的發展が期待され同時にトビイカ資源の有効利用も倍加されよう。

カツオ餌料調査は、従来から断片的に実施されてきたが、昭和52年度からはカツオ餌料安定供給に関する試験研究をテーマとして地元産餌料魚の大量、かつ、長期蓄養技術の確立を図ることと、蓄養適種の選定及び餌料魚の資源生態調査等が行われ、生簀網内での餌料魚の収容密度の問題、蓄養魚の適正給餌、数種類の長期蓄養可能魚種が確認され、地元産餌料魚の効率的利用開発を目指し目下試験研究継続中であります。その他水産庁の委託を受け原子力軍艦の寄港地であるホワイトビーチ一帯と中城湾内に棲息する魚、貝、藻類の放射能汚染の実態調査が行われておりますが今日まで汚染たれた形跡は全くありませんのでご安心の程を!!以上のように事業の概況を思い出すまま述べて見ましたが、これまで永い間、無事故で試験研究が続けてこられたことに対し船長はじめ乗組員一同に感謝の意を表するとともにくろしおが漁業調査船としての役目に終止符を打つことに相なったのには一抹の寂しさもあるが、これも老いたものの宿命であろうか。